別冊太陽

日本のこころ49

明治・大正・昭和

子ども遊び集

SPRING'85

日本のこころ——49

明治・大正・昭和

子ども遊び集

遊びについてなど
——遊びの世界の今昔し——
今江祥智 4

明治・大正・昭和
子ども遊び集
8

おもちゃ絵　張子の面　立てばんこ　とんだりはねたり　凧　犬棒かるた　福笑い　鉄胴ゴマ　アルミニウム製飛行船　ブリキ製戦闘機　ジープ　ゼンマイ仕掛けのリムジン　機械体操人形　ドイツ・メルクリン社製貨車　竹返し　ぶんぶん　ブローチ　日光写真　メンコ　万年ノート　ディアボロ　ベーゴマ　パラシュート　ヒラヒラ　拳玉　万華鏡　山吹鉄砲　板返し　ハッカパイプ　知恵輪　ヒヨンヒョン駒　水中花　グリコのおまけ　姉さま人形　土人形　まごとセット　ぬりえ　お手玉　木製タンク　アンチモニーの兵隊　行軍将棋　竹の機関銃　百連発ピストル　コリントゲーム　ブリキ製金魚　ポンポン船　からから　土笛　幻燈機　糸巻きタンク　模型飛行機　水鉄砲　付録の組立て模型　磁石人形　パチンコ　他

路地裏と自然の中の遊び
I(19) II(39) III(91)
中田幸平

釣り狐　馬とび　子をとろ子とろ　花いちもんめ　なんこ　十六ムサシ　レンゲのメカネ　ホオノキのお面　柿の葉人形　桑の木の刀　松の皮舟　大根弓　フウセンムシ　トンボ捕り　ナマズ釣り　ウナギ鈎み　ドジョウブチ　雀捕り　トリモチ　ブッチメ　鳶飼い　かもめつり　他

教育と子どもの遊び
唐澤富太郎 111

童心をときめかせた夜店のきらめき
——縁日風景裏おもて——
中田幸平 121

子どもが覗いたあやかしの世界
——見世物小屋探訪——
古河三樹 126

明治・大正・昭和
子ども遊び年表
斎藤良輔編 131

近刊案内・別冊太陽既刊案内
読者からの便り・編集室・次号予告
146 143

江戸から明治へ　斎藤良輔 10
凧は世につれ世は凧につれ　斎藤忠夫 15
ブリキ玩具の歴史　多田敏捷 29
舶来玩具への憧れ　横山隆一 32
〝駄菓子屋文化〟　加太こうじ 38
メンコ　斎藤良輔 40
ベーゴマ　中田幸平 43
ヨーヨーと拳玉　斎藤良輔 45
夜店のおもちゃと食物　杉山芳之助 50
紙芝居　加太こうじ 55
おまけと景品　入江正彦 57
人形とままごと　斎藤良輔 68
基礎玩具　斎藤良輔 89
手作りおもちゃ　中田幸平 104
立川文庫と小型講談本　加太こうじ 107
雑誌の「付録」　入江正彦 109

別冊太陽
No.49
SPRING'85

表紙＝明治時代のブリキ製馬車
目次カット＝岡本帰一画「コドモノクニ」昭和三年二月号・一〇月号より

THE SUN
Special Issue
No. 49 Spring '85

Children and toys

Children no longer go out to play at the street corners. Apartment houses and housing complexes have occupied fields or space behind alleys where children in town used to play. With the appearance of personal computer games, toys such as pasteboard dumps or shell tops have disappeared. Why not now collect children's plays or toys, together with our childhood memories? Excitements we felt when we first went into a cheap candy store, or when we saw picture-card shows, or when we enjoyed shopping at fair stalls should be handed over to our next generations. In this special issue, children's toys from Meiji period are all collected, and the world of children in the periods of Meiji, Taisho, and Showa is reconstructed.

Editor-in-Chief : Yoji Takahashi

◉掲載資料所蔵・編集協力者一覧

井上敬二郎／市原達朗／入江正彦／加太こうじ／唐澤富太郎／北原照久／講談社資料センター／斎藤忠夫／斎藤良輔／佐藤徹／シンコー・ミュージック／杉山芳之助／瀬田きくよ／台東区立下町風俗資料館／高久信一／多田敏捷（日本玩具史料室）／中田幸平／日本玩具資料館／野口存弥／博品館トイ・パーク／本地陽彦／村井かるた資料館／八木田宜子／ユニオンモデル株式会社／吉徳コレクション

■写真＝清水行雄／本誌写真部

〔五十音順・敬称略〕

編集＝高橋洋二・久田肇・岡みどり・澤田陽子
レイアウト＝寺田有恒・藤代　茂
校正＝荒尾克己

子ども遊び集

明治
大正
昭和

今江祥智
斎藤忠夫
中田幸平

入江正彦
斎藤良輔
古河三樹

加太こうじ
杉山芳之助
横山隆一

唐澤富太郎
多田敏捷

協力＝ピエロ・ド・ピエール　むらい こうじ

遊びについてなど

——遊びの世界の今昔し——

今江 祥智

1

《せんせい
にんげんは
なんのためにいきているんですか
ぼくは
たっぷりあそんで
たのしむためだとおもいます
せんせいはどうおもいますか》

神戸は鹿島和夫学級一年一組の、えぐさたくや君の詩である。先生ならずとも、大人ならば誰もが、それこそ頭にがつんと一発くらったような気にさせてくれる問いかけである。ほんまにそのとおりや……と、素直に答えてやることを、大人はいつのころから忘れるのだろうか。

そう言われれば、子どものころはまことにたっぷり遊んでいたものだと思いおこす。一年生のころは木片ひとつあればよかった。近所の砂場（ほんとうは砂置場だった。工事があると運びだされ、いつのまにかまた山積されていた）に木片をもっていくと、まず砂をかためて高架線をつくり木片電車を走らせた。ひとつなら各停、二つあれば準急に見立て、三つもあると急行に仕立てた。デンデンゴオ……とつぶやきながら木片を押すだけなのに、至極満足なのであった。

器用な友だちがやってきて丁寧にトンネルを掘ってくれると、木片は列車になった。長いトンネルは中が暗くて本物みたいな気がした。そしてわたしたちは外が暗くなるまで砂場での電車ごっこをやめなかった。あるとき誰かが恥しそうにヤマブキの花をもってきたら、それをのせた電車はたちまち花電車ということになった。

画＝岡本帰一（六点とも）

そこのところをロジェ・カイヨワ先生は難しくこう仰言るのである。

「すべて遊びというものは幻想（illusion ―この言葉は、文字通り、遊びに入ることin-lusioを意味している）ではなくても、少なくとも、閉ざされた、約束事に基づく世界、いくつかの点で虚構的な世界の一時的受容を前提とする」（『遊びと人間』岩波書店 二八頁）

一人でいても二人になろうとも、砂場はすぐに阪急電車の梅田駅に変貌を遂げた。簡単な呪文さえ不要だった。女の子たちが木の葉や花汁でままごとをするときと同じであった。木に葉や花がついていさえすれば、それはすぐ店屋に変身するのである。花が少ない街中では折紙を水に浸してレモン水やイチゴ水を作って店屋ごっこに精を出した。男の子たちが交替で運転手や車掌やポイント係りになっていたとき、女の子たちは交替で店長さんやウエイトレスやお客になっていた。

花莫蓙（ござ）一枚がお屋敷の奥座敷に変り、年上の女の子はごりょんさん（商家などの若奥様）を気取り、年下のが上女中になって「へえ……」などと受け答えするのである。

――ままごとなんかして、女みたいや。

という嘲りさえ甘受すれば、男の子は早速だんさん（御主人）にしてもらえた。うまいぐあいに家から父さんの鞄を持出せれば、その子はたちまちお医者ということになった。中勘助が『銀の匙』で美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しく描いた主人公の少年と女友だちの遊びの世界は、あのころには至る所にあった。後年『銀の匙』を読んでお蕙ちゃんなる美少女を知ったとき、わたしは昔遊んだ女友だちの一人の面影をお蕙ちゃんに重ねていた……。

＊

それはさておき、もう少し学年が上になると、木片はもう電車に見えなくなった。小刀を使って削り直し、紙やすりをかけて磨き、窓枠の筋目をつけ、彩色して電車のミニアチュールを作りあげた。あちこちの電車を見にいって色やデザインを確かめてお気入りの電鉄の電車に仕上げた。小さな留め金を都合して連結器代りにし、五両六両連結のも作ってその出来を競い合うことになった。

そのころわが家の兄ちゃんは、当時の最高級玩具である電気機関車の模型を買ってもらい、自分の八畳の部屋一面にレールを敷き、トランスの操作一つで自由に走らせて遊んでいた。それはどこか異国の匂いがする玩具だった。兄ちゃんはそれを神聖視し、弟たるわたしなんかには指一本触れさせてくれなかった。兄ちゃんは客車や機関車、はては装甲列車まで揃えていってはその「財産」を増やしていき、わたしは、その自由自在で本物そっくりの動きを（しかも兄ちゃんの意のままに）繰返す模型群を、次の間から指をくわえ、有難く見せていただくばかりだった。

それでもわたしは兄ちゃんを羨望したり、ましてや恨んだりはしなかった。兄ちゃんは兄ちゃんなりに弟を籠絡する術を知っていた。

一文菓子屋である。

2

あのころは、どの町内にも何軒かあった一文菓子屋は、それぞれの町内の子どもたちの「社交場」であった。女の子たちは、恐る恐るやってきてはお目当のもの（おはじき、モール、リリアン、千代紙など）を買うと、さっさと引揚げたが、男の子にはもう一つの愉しみがあった。ビー玉、独楽、べったん（めんこ）、サイコロ、花火、あてもん（くじびき）などから欲しかったものを買ったあと、店の奥にある鉄板のまわりに坐り、お婆ちゃんにやいてもらった一銭やき（お好みやき）を食べるのである。ソースをだぼだぼに塗り、熱あつのやつをハフハフ言いながら頬張って平らげていく愉しみなのである。

兄ちゃんは弟をつれて一文菓子屋にでかけ、お好みやきをごちそうしてくれた。それも家からくすねてきた卵を手品みたいに取出すと、婆ちゃんに断って割ってくれるのである。買食いは学校によって禁止されていたが、こちらは兄ちゃんつきである。それに卵つきだから二重に嬉しかった。兄ちゃんはお好みやきの上製でわたしを籠絡したのだった。

夏には大阪でいう〝ちびたいちびたい〟ひやしあめやらアイスクリンをおごってくれた。アイスキャンデーを紙袋に入れてもらい、何とか少しでもとかさないうちに家に走って帰り、兄ちゃんとなめるのも心愉しい一種の遊びだった。一人のときはうつし絵を自分の腕や手の甲にはり、もう少しこちらが大きくなると、兄ちゃんはお古の日光写真の道具を払い下げてくれた。大屋根にあがり、写真が出来る間、うとうと眠っている怠惰な時間の何とのんびりと甘く流れたことか。

また兄ちゃんの読み

古しの「子供の科学」誌は、わたしに科学への情熱(?)とりわけ天文学への情熱をかきたててくれた。天文学者になるんや——と心ひそかに決意して、小遣いをため、小さな望遠鏡を買ったときのどきどきするような気もち。それで初めて月のあばた面を眺めたときの、胸がきゅんとなるようなときめき。それはわたしにとっての「空想より科学」への転換期であった。遊びの匂いはうすれ、何やら「学問」の世界へ忍び足でふみこんだ感じがあった。ましてや四ッ橋の電気科学館へ通ってプラネタリウムで眺めた星空のふしぎ。星座や伝説や彗星や惑星の話にくいいるように聞きいったあのころ。

わたしはふつうの子どもの遊びの時間の中から自分の好きなことを見つけ、階段を一段のぼった気もちだった。そのまま気張ってその道を歩き続ければ、ひょっとすると本物の天文学者になれたかもしれなかった……。

そんな希望をあっさり消してくれたのは、あのいくさである。大阪大空襲である。

わたしたち一家は家を焼かれ、住みなれ遊びなれた街を逃げだしておふくろさんの故郷たる紀州の橋本へ落ち着いた。紀ノ川沿いの古い小さな町である。そしてそこでわたしたち兄弟は街では味わうことのできないもう一つの遊びの世界へ誘いこまれた。しかもそれは「実益」を兼ねていた。魚釣りであった。

いろんな方法があった。石を積んで一晩置き、翌朝早々、そこに入ったウナギを突くやり方、川っぷちの石の下にひそむナマズを誘い出すやり方、田んぼ沿いの溝のシマドジョウを小網で伏せるとり方、そしてむろん竿釣りから池のフナのつり方まで、田舎町の友だちは、親切に教えてくれた。大阪の掘割りに浮かぶフナや小魚をすくうのとはちがって、どこか大人の匂いのするやり方が嬉しくて、兄弟とも夢中になった。

釣れの遠い昼は、思いきり泳いだ。

墓地での肝試し、キツネがり(とれなかった)、タヌキいぶし(とれなかった)、桑の木に上っての桑の実のむさぼり食い、ユスラウメの実やグミの実を採って食べること等々、昔ながらの遊びと実益とを兼ねた田舎町での新しく知った「遊び」の数々は、街の子たるわたしたちには、ことごとくが目新しく、わたしは天文学者になろうとしたことを忘れて遊び呆けていた。

それにまた、はでに喧嘩もやった。素手による喧嘩という「ルール」があったから、勝っても負けても後をひかなかった。これも一種の遊びだと分っていった。大阪では喧嘩大将だった兄ちゃんはおおいに男をあげ、わたしはその弟というので一目置かれた。兄ちゃんの庇護の下、わたしも弱いながら喧嘩の修業に励んだ日々でもあった。

大阪ではあれほど近かった「いくさ」が、田舎町橋本では、いささか以上に遠のいて見えた。空襲もなく、サイレンが鳴るだけののんびりした町であった。

しかし、兄ちゃんはやがて学徒動員で工場へ働きに出る。こちらも大阪淀川の堤防の修復土木工事(爆撃の跡埋め)にひっぱり出される。

牧歌的なさまざまな「遊び」は、そのときまで続いていた……。

3

〈四時以後は学校に残らないこと〉
〈同学年以外の子と遊ばないこと〉
といった通達の出される小学校の多い当節、子どもたちはいった

いどんなふうに遊ぶのだろうか。一文菓子屋に代り、「塾」が社交場（兼知的〈?〉決闘場）になりつつある当節、子どもたちはどこで友情をかわすのだろうか。

塾は昔にもあった。習字とそろばんの塾にはわたしも通った。先生は丁寧に添削してくれた。級（ランク）づけもされた。けれど競合は穏やかなものだった……。

昔の玩具は一部復活し、デパート(!)や玩具店でも売っている。けれど、それは遊ぶための玩具としてではなくて、ファッションのように扱われ、ノスタルジックに見られ、大切に扱われている。一文菓子屋は死んでしまった。モダンでおいしい菓子やケーキが街に溢れ、子どもたちはいつでもどんなものでも手に入れることができる（ように見える）。

デパートの玩具部、専門のトイ・ショップ、町内の玩具屋さんには、同じものが溢れている。チョロQからパソコンまで。西洋人形から小さなぬいぐるみまで。合体ロボットからキャラクター商品まで。

自分自身の、世界にただ一つの人形を探す代りに、みんながもっているのと同じ人形を買い求めている当節、遊びの質もおそろしくかわってきている。

そこのところを先のカイヨワ先生はこうまとめられる。

「快楽であったところのものが固定観念となり、脱出であったものが義務となり、気晴らしであったものが、情熱、偏執、不安の源泉となる。遊びの原理が変質したのである」（同訳書六五頁）

＊

レイ・ブラッドベリの短篇『草原』では、立体パノラマの草原で遊ぶ子どもたちの、親殺しという恐ろしい未来風景がさり気ない筆致で、きわめてリアルに描かれている。もっとも、そうした未来の玩具の変貌ぶりにまで心はせるよりも、本来は遊び道具であるはずの金属バットのもう一つの使用法を発見し実行しているいまの子どもたちのことを考えることの方が、いまの大人としての「義務」かもしれない。未来ならば花火といった豪勢あるいは繊細な遊びに使う火薬を極端に「発展」させて核弾頭をどっさり作って配備している大人としては。

このあたりで再び冒頭に引いた子どもたちの詩集（でもある）『一年一組せんせいあのね』の続篇からもう一つの詩を引用したい。

はみがき　まつした　やすゆき

《はだかで
はをみがくと
ちんちんがゆれます》

この「発見」こそ、子どもの遊びの原点ではあるまいか。本来ならば何もいらないのである。すっぽんぽんで——裸で出発すればよいのである。敗戦前後、紀ノ川で一緒に泳いだ田舎町の子は男女共すっぽんぽんで平気であり、赤い褌などしめていたわたしたち兄弟は恥シガリの赤フンという渾名を奉られて、いささか軽蔑されていたふしがあった……。

玩具も単純なものの方が遊び方が複雑であるものだ。あやとりや影絵遊びや、お手玉やかくれん坊を思いおこすがよいのであります。

そのかわりに、さまざまなフィクションが、イリュージョンが、イマジネーションが色づけしてくれる。

一冊の絵本に一つの劇場を見つけたり、一冊の子どもの本で時間空間を超えた「旅」ができるのも、子どもなればこその発想なのであり、わたしたち「童話作家」なるものは、そうした恐るべき子どもに本を通してメッセージを送るという、やばい仕事をしているわけである。子どもと同じエネルギーなしに一緒に「遊び」続けられるわけはないのであります。（いまえ　よしとも）

手遊びづくし

江戸末から明治中期にかけて流行したおもちゃ絵の一つ。おもちゃ絵は子ども向けの絵草紙で、手遊び絵ともいう

321093

新版相撲づくし

国利画。相撲は明治期もっとも人気のあったスポーツ。おもちゃ絵の一つだが、切り抜いてブロマイドに

面

明治初期の面は、里神楽の木彫り面が中心であった。これは木彫りのおかめの面

にわか

張子の面。木製にくらべて安価だった

張子の面

明治時代の軍人の顔

張子の面

武将

江戸から明治へ

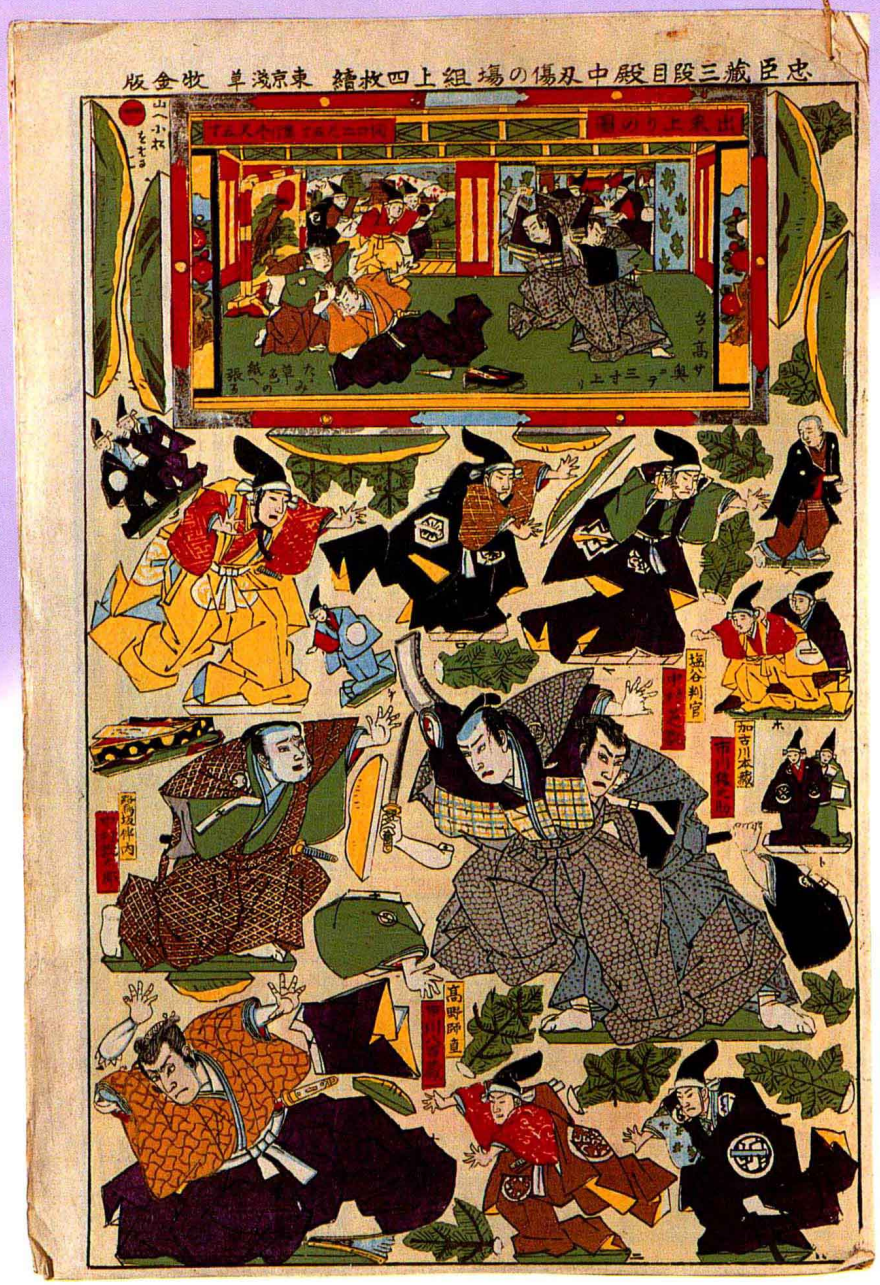
幕末から明治開化の新時代にかけて、たくさんの子ども遊びが、〈児童文化〉の遺産として受け継がれた。

「とんだりはねたり」や「猫と鼠」のようなからくりおもちゃ、江戸絵師たちが子どもたちのために描きはじめた「おもちゃ絵」など。ゼンマイ仕掛けのアクション・トイとか、子ども向きのマンガ、絵本が生まれていなかったころには、それらが童心をどんなによろこばせていたことか。寺子屋帰りの子どもらが歌いながら遊んだ「ここはどこの細道じゃ」は、新しく学校通いがはじまった明治の子たちにもリレーされて、天神さまの境内が同じ遊び場となった。

欧米風の運動遊戯やブリキ、ゴムなどの新玩具に押されながら、「立てばんこ」や手作りの「糸まり」遊びは生き残った。新しいもの、古いものとが織りまざって、日本独特の「子ども遊び」が花開いた。それは近代化への道を歩みだした、この国の姿でもあった。

（斎藤良輔　玩具研究家）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



立てばんこ

江戸後期から明治にかけて、京阪・江戸（東京）で流行した。社寺の風景、歴史上のエピソード、歌舞伎の名場面などを、厚紙で裏付けして立体的に組み上げる。右は『忠臣蔵』三段目殿中刃傷の場。四枚続きの一枚

立ち絵紙芝居

縦一二㎝、横五㎝くらいの紙の表裏に絵を描き、高さ二〇㎝、間口六〇㎝ぐらいの舞台で操られる紙人形芝居。明治二〇年頃より寄席で演じられたが、昭和初期におこった紙芝居に押されて衰退した

立ち絵

一枚ずつ広げると絵が立つようになっていて、次々にストーリーが展開する。明治二、三〇年ごろ、円朝の弟子が創始したといわれる。写真は『弁天小僧』より

道化ダルマの写し絵

おもちゃの幻燈機をつくり、その前で切り抜いた絵を動かして、幻燈の真似事をする、明治の遊び。掛軸のダルマが脱け出して、おかみさんと相撲をとったが投げとばされて……というストーリー

昔ばなし福引

明治の絵草紙屋などで売られていた糸引きくじ。なにが当たったのだろうか

糸まり

五色の絹糸を丹精こめてまいて作られた糸まりは、羽子板とともに、女の子へ、春のお祝いとして贈られたという

猫と鼠

箱の引蓋を引き、猫が後退すると鼠が覗き、もどして猫が進むと鼠が箱の中にかくれる。江戸のからくりおもちゃだが、明治期には花形輸出玩具に

目無しダルマと獅子頭

ともに張子細工。江戸中期から玩具として流行した

犬張子

犬張子はおもちゃの中では最も古いものの一つで、当初、産室に魔除けとして置かれた。近世に入って江戸を中心に作られ、赤ちゃんのいる家には、かならず一つぐらい枕元などに置かれていたものである

とんだりはねたり

からくり人形の一種。割竹の下に仕掛けられた糸のばねと松ヤニの力で張り子人形が飛び上がる

新板玉転遊

なにかビー玉のようなものを転がして当てものをしたのだろうか。ゲームの一種か

でんでん太鼓

奈良時代に中国から渡来した振り鼓（つづみ）に由来する嬰児用玩具

広瀬やっこ凧

明治三七年の日露戦争時の凧。軍神広瀬中佐。作った凧屋も広瀬凧店

つき浪凧

明治初期の凧の絵柄には文明開化の中にも江戸のなごりを残しているものが多い。その代表的な赤い月と波

のんきなとうさん凧

大正末期、麻生豊の新聞連載人気漫画の「のんきなとうさん」も凧の絵柄に

エノケンの一銭凧

昭和一五年頃、庶民の最後の娯楽としてエノケンやロッパの凧あげに、子どもも大人も心をなごませた。この後太平洋戦争で凧は壊滅

般若凧

昭和一〇年代、物資の無い中で作られた石版刷の安凧。般若は古くからの民間信仰で魔除けの意味があった

日清戦争凧

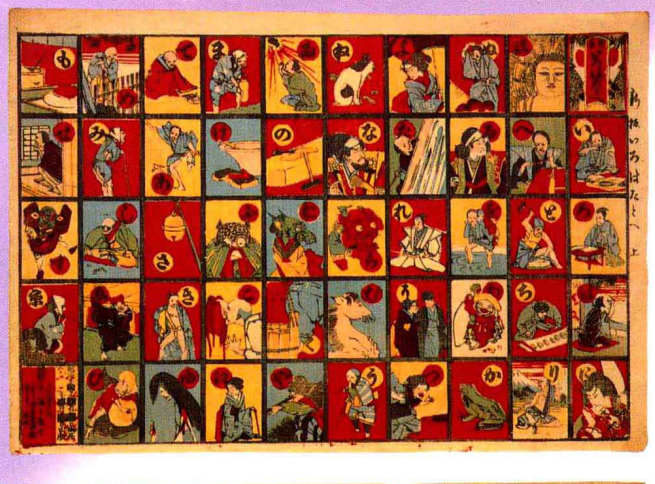
明治二七年。戦勝に沸きたつ世相の中で作られたキワモノ凧。将官が敵将を撃退している

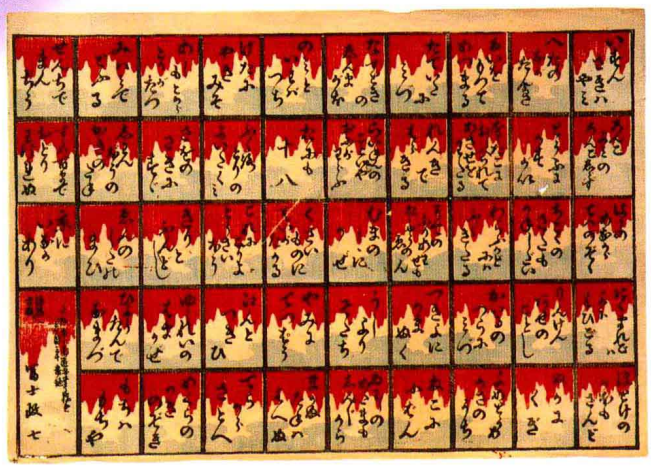
犬棒かるた紙

上二段は、犬も歩けば……のいろはかるた関東版。三段めから忠臣蔵、武者、なぞなぞの各かるたが付いている

かるた紙

上方版いろはかるた。切り離して用いる





百人一首かるた

藤原定家選の百人一首が百人一首かるた遊びとして、江戸中期以降、さかんに遊ばれた。明治に入ってもより大衆化され、子女の間に教養がらみで普及した

凧は世につれ世は凧につれ

――明治・大正・昭和キワモノ流行凧――

江戸時代は一文凧、明治になると一銭凧、現代では百円凧ということになるのだろう。お正月になると裏通りのおもちゃ屋や、駄菓子屋の軒端に束になってぶらさがっている、いわゆる子どものための安凧である。つくって、あげて、やぶれて、すてられる。その場かぎりの消耗品。はかない宿命の悲しき玩具である。

それを承知で凧師たちは、むかしながらの絵凧や字凧の他にも、この一年間もっとも話題を賑わせた巷の出来事や、人気者ヒーローの凧もたくさんつくって、その年だけの正月に売りだす、それがこのキワモノ流行凧。描かれた軍人の顔がどうしても武者絵のヨシツネになったり、可愛い金太郎になってしまうのもやむを得まい、それなりのメルヘンがあり楽しさがある。

明治・大正・昭和と、なんとなく捨てずにしまっておいた凧を、あっちこっちのコレクション箱の中をかきまわして探しだし、順序よくならべてみた。一枚一枚どの凧も一瞬の明滅をくりかえしてきたマッチ火のようにはかないものだが、ガラクタにはガラクタの庶民感覚のあふれた人間ドラマの歴史が、ほのぼのと甦ってくるものである。

（斎藤忠夫　凧歴史風俗研究家）

福笑い

双六と並んで正月のお座敷遊びの代表的なもの

東京名所双六

明治時代の東京の名所旧蹟を巡る絵双六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com